

ただし、 $q_2 > q$ のときは

$$\begin{aligned} q_2 &= q \\ q_1 &= 0 \end{aligned} \quad (2.23)$$

とする。

2.3 1段目タンクの数値解法

1段目のタンクの解法にあたって、次の変数変換を行う。

$$y_1 = q_1^{p_2}, \quad y_2 = \frac{d}{dt}(q_1^{p_2}) \quad (2.24)$$

その結果、式(2.1)～式(2.3)は以下のように表現される。

$$\begin{cases} \frac{dy_1}{dt} = y_2 \\ \frac{dy_2}{dt} = -\frac{k_{11}}{k_{12}} \frac{p_1}{p_2} y_1^{p_1/p_2-1} y_2 - \frac{c_{13}}{k_{12}} y_1^{1/p_2} + \frac{r}{k_{12}} \end{cases} \quad (2.25)$$

ここに、

$$c_{13} = 1 + k_{13} \quad (2.26)$$

上式の未知定数は c_{11}, c_{12}, c_{13} の3つであり、これらの定数の最適化にはニュートン法を用いた。

式(2.25)はさらに式(2.27)のようにベクトル表示できる。

$$\frac{dY}{dt} = F(Y) \quad (2.27)$$

ここに、

$$Y = [y_1 \quad y_2]^T \quad (2.28)$$

$$F(Y) = \begin{bmatrix} f_1(y_1, y_2) \\ f_2(y_1, y_2) \end{bmatrix} \quad (2.29)$$

$$f_1(y_1, y_2) = y_2 \quad (2.30)$$

$$f_2(y_1, y_2) = -\frac{k_{11}}{k_{12}} \frac{p_1}{p_2} y_1^{p_1/p_2-1} y_2 - \frac{c_{13}}{k_{12}} y_1^{1/p_2} + \frac{r}{k_{12}} \quad (2.31)$$

2階非線形方程式(2.27)を近似線形化する。1ステップ前における Y の値を Y^* とし、 $F(Y)$ を1次の項までTaylor級数展開した式(2.32)を用いると、式(2.27)は式(2.33)に変換される。

$$F(Y) = F(Y^*) + A(Y^*)(Y - Y^*) \quad (2.32)$$

$$\frac{dY}{dt} = A(Y^*)Y + B(Y^*) \quad (2.33)$$

ここに、

$$A(Y^*) = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ a_1 & a_2 \end{bmatrix} \quad (2.34)$$

$$\begin{aligned} a_1 &= \frac{\partial f_2}{\partial y_1} \\ &= -\frac{k_{11}}{k_{12}} \frac{p_1}{p_2} \left(\frac{p_1}{p_2} - 1 \right) (y_1^*)^{p_1/p_2-2} (y_2^*) - \frac{c_{13}}{k_{12} p_2} (y_1^*)^{1/p_2-1} \end{aligned} \quad (2.35)$$

$$a_2 = \frac{\partial f_2}{\partial y_2} = -\frac{k_{11}}{k_{12}} \frac{p_1}{p_2} (y_1^*)^{p_1/p_2-1} \quad (2.36)$$

$$B(Y^*) = F(Y^*) - A(Y^*)Y^* = \begin{bmatrix} 0 & b_2 \end{bmatrix}^T \quad (2.37)$$

$$\begin{aligned} b_2 &= \frac{k_{11}}{k_{12}} \frac{p_1}{p_2} \left(\frac{p_1}{p_2} - 1 \right) (y_1^*)^{p_1/p_2-1} (y_2^*) \\ &\quad + \frac{c_{13}}{k_{12}} \left(\frac{1}{p_2} - 1 \right) (y_1^*)^{1/p_2} + \frac{r}{k_{12}} \end{aligned} \quad (2.38)$$

式(2.33)を数値計算の便宜上、離散化方程式に変換する。

$A(Y^*)$ と $B(Y^*)$ が定係数行列の時、 k を任意のタイム・ステップとして、式(2.33)は差分方程式(2.39)に変換できる。

$$Y_{k+1} = \Phi Y_k + \Gamma B_k \quad (2.39)$$

ここに、

$$\begin{cases} Y_k = [y_1 \ y_2]^T_k & , \quad B_k = [0 \ b_2]^T_k \\ \Phi = \begin{bmatrix} \phi_{11} & \phi_{12} \\ \phi_{21} & \phi_{22} \end{bmatrix} & , \quad \Gamma = \begin{bmatrix} \gamma_{11} & \gamma_{12} \\ \gamma_{21} & \gamma_{22} \end{bmatrix} \end{cases} \quad (2.40)$$

なお、 Φ および Γ は次の級数和で求められる。

$$\begin{aligned} \Phi &= e^{AT} \\ &= I + AT + \frac{1}{2}(AT)^2 + \frac{1}{6}(AT)^3 + \dots + \frac{1}{m!}(AT)^m \end{aligned} \quad (2.41)$$

$$\begin{aligned} \Gamma &= (e^{AT} - I)A^{-1} \\ &= T \left(I + \frac{1}{2}AT + \frac{1}{6}(AT)^2 + \frac{1}{24}(AT)^3 + \dots + \frac{1}{m!}(AT)^{m-1} \right) \end{aligned} \quad (2.42)$$

ここに、 I ：単位行列、 T ：計算時間間隔

通常、級数は第5項まで展開すれば十分なので、 $m=4$ としたときの Φ および Γ の要素を求めると、次の通りである。

$$\begin{cases} \phi_{11} = 1 + \frac{1}{2}a_1T^2 + \frac{1}{6}a_1a_2T^3 + \frac{1}{24}a_1a_3T^4 \\ \phi_{12} = T \left(1 + \frac{1}{2}a_2T + \frac{1}{6}a_3T^2 + \frac{1}{24}a_2a_4T^3 \right) \\ \phi_{21} = a_1\phi_{12} \\ \phi_{22} = 1 + a_2T + \frac{1}{2}a_3T^2 + \frac{1}{6}a_2a_4T^3 + \frac{1}{24}(a_1a_3 + a_2^2a_4)T^4 \end{cases} \quad (2.43)$$

$$\begin{cases} \gamma_{11} = T \left(1 + \frac{1}{6}a_1T^2 + \frac{1}{24}a_1a_2T^3 \right) \\ \gamma_{12} = T^2 \left(\frac{1}{2} + \frac{1}{6}a_2T + \frac{1}{24}a_3T^2 \right) \\ \gamma_{21} = a_1\gamma_{12} \\ \gamma_{22} = \phi_{12} \end{cases} \quad (2.44)$$

$$a_3 = a_1 + a_2^2, \quad a_4 = a_1 + a_3 \quad (2.45)$$

所要流出高 q_1 は、漸化式(2.39)により任意のタイム・ステップ k における $y_1 = q_1^{p_2}$ と $y_2 = \frac{d}{dt}(q_1^{p_2})$ の値が逐次計算されるので、式(2.24)を用いて次のように求められる。

$$q_1 = y_1^{1/p_2} \quad (2.46)$$

2.4 2段目タンクの数値解法

地下水流出成分の未知定数は k_{21} と k_{22} の2つとなる。これらの定数は、以下の方法により算出される。貯留関数による地下水流出成分を表す式(2.5)と式(2.6)は、以下のように変形される。

$$\frac{ds_2}{dt} = k_{21} \frac{dq_2}{dt} + k_{22} \frac{d^2 q_2}{dt^2} = f_1 - q_2 \quad (2.47)$$

すなわち、

$$\frac{d^2 q_2}{dt^2} + c'_1 \frac{dq_2}{dt} + c'_0 q_2 = c'_0 f_1 \quad (2.48)$$

ここに、

$$c'_1 = \frac{k_{21}}{k_{22}}, \quad c'_0 = \frac{1}{k_{22}} \quad (2.49)$$

フィルター成分分離法による線形方程式(2.8)と貯留関数法による線形方程式(2.48)は同じ表現になっており、全流出量 q が浸透供給量 f_1 に置き換わっているだけである。

2式の間係数を調べるために、式(2.48)に式(2.3)を代入すると、式(2.50)が得られる。

$$\frac{d^2 q_2}{dt^2} + c'_1 \frac{dq_2}{dt} + c'_0(1 + k_{13})q_2 = c'_0 k_{13} q_1 \quad (2.50)$$

式(2.50)の定数項部分に式(2.49)の関係式を代入すると、以下の式が得られる。

$$c'_0(1 + k_{13}) = \frac{1 + k_{13}}{k_{22}}, \quad c'_0 k_{13} = \frac{k_{13}}{k_{22}} \quad (2.51)$$

既往洪水の解析結果によれば、 $k_{22} \gg 1$ であることから、 $1/k_{22} \approx 0$ とみなすことができる。したがって、近似的に次式が成り立つと考えられる。